

# 花の歌 歳時記

前田康子

結婚したのは五年前の一月だった。最初のあいだ、会社から帰って来る夫と、どんな話をするかという事に悩んだことがあった。サラリーマンの父のことを思い出すと、仕事で疲れてる夜は食卓の時間までびりびりしていて、無言でご飯を食べていたりしたからだ。

「今日、仕事どうだった？」私が聞くと、「まあね。」とか「うん、まあ。」とかで、「それよりも今日、こんな変な雲が出ていた。」と話し始める。そして図鑑を広げてみたりする。変わった雲の話が一週間続くと、今度は帰り道に見た星の話だったり、鳥の話だったり。

一月も終わりに近づくと、どこからか梅のいい香りがしてきた。梅の花が大好きな夫はしきりに梅のことを話す。

はじめは変わった人だと思っていたが、そんな会話は二人の子どもが生まれた今も、続いている。誰が先に季節の始まりを見つけるか。今では四歳の息子が一番だったりする。



絵・冬菫 / 小柳吉次



## 水仙

毎月、この欄の絵を描いて下さっている、小柳吉次氏のボタニカルアートの講座を、テレビで拝見したとき、初めての花はラッパ水仙だった。複雑な花の姿をさまざまな方向から観察し、丹念に描いていく様子は、絵画でありながら、植物学的に花の美しさを解明し

ていく作業である。

短歌でも花の美しさばかり詠むのではなく、少し科学的な眼が入ると面白い歌になる事がある。

水仙は新年の花藁のごとき苞より正しく五花現れぬ

北沢郁子「秋の視座」

水仙をよく見て詠んでいるうたである。言われてみれば、花の後ろ側についている苞の部分は藁のような色、感触がする。

水仙が折り紙で折ったように、くつきりと咲いているのは、年の始めの凜とした気持ちに似合っている。

水仙は低体温の花ならむ歩みつわれは言葉あたたむ

関口ひろみ「あしたひらかむ」

低体温の花という表現が面白い。ヒヤシンスやチューリップのような球根から育つ植物に共通してある感覚。花びらや葉のすべすべした肌触りからそう感じるのだろう。

胸のうちいちど空にしてあの青き水仙の葉をつめこみてみたし

前川佐美雄「植物祭」

佐美雄、二十七歳のときの歌集、『植物祭』は不安定で孤独で、どこへも持って行きようのない心があふれている。その心はそのまま花や木にぶつけられた。

清い水仙の葉を詰め込んで、おのれに対する憎しみをどうにかしたいと、もがき苦しんでいる。

すいせん  
水仙





## 福寿草

福寿草はめでたい正月の花といわれているが、野生のものは早いところでは二月に咲くらしい。正月に咲くものは改良された栽培種であるという。

背が低い花だから、見つけたときはしゃがんで見なければよく見えない。よその庭に咲いているのを嬉しくて眺めた事がある。その家の主人が、大事に大事に咲かせた花という感じだった。

土間より直かに苔芽もたげつつこれ等の福寿草の太短かさよ

木下利玄「みかんの木」

頭を地面につけるようにして福寿草を見ているような歌。福寿草の花は陽の光の動きに沿って、花を動かすという様子をテレビで見た事がある。花の温度を暖かくして、少しでも虫がとまってくれるようにしているらしい。

福寿草の苔いとほしむ幼な子や夜は開  
如裏の火にあててをり

島木赤彦 太虚集

福寿草のかたき苔にこの夕息ふきかけて  
る子どもはや

同

福寿草の鉢を遠くまで行って我が子を買って来て、大切に世話をしているという六首の

連作。福寿草の花が開くの而今か、今かと待っている、子どもの姿がいきいきと詠まれている。「生き物をよく観ろ」とつねづね赤彦は子供たちに言っていた。それが一番の教育方針であった。

ふくじゆそう  
福寿草



## 冬薔薇

冬薔薇は、普通は、秋咲きのものが冬まで残って咲いているものをいう。葉は、ほとんど枯れていたりするから、棘トゲがよく目立つ。そのせいか、冬薔薇を見ると、ワイルドの『ナイチンゲールとばらのはな』という童話を思い出す。白い薔薇を血で赤くするために、

自分の腹を棘に押しつけて、小鳥のナイチンゲールは鳴く。

薔薇咲く夜、地の冷えよりも天の冷え、  
そしてそれよりいちにんの冷え

伊藤一彦「男魂歌」

冬の夜、ともした蠟燭ろうそくのように薔薇が咲いている。空気の冷たさ、オリオンの光が冴え



ら 薔 薇  
ば 薔 薇  
ふ ゆ 冬

る。そして、人の心をもっとも冷えさせてしまう絶望。孤独。そのようなものをこの歌に感じる。

パソコンの横にバイオの薔薇は咲き日々  
しろがねの水を欲るなり

栗木京子「綺羅」

子どもに、野菜は工場で作っているのかと聞かれ、がっかりした事があった。暖房のきいた部屋で、パソコンの横に咲く、バイオで作られた薔薇。そんな光景も今ではすっかり見慣れてしまった。バイオのものが食べ物ははじめ、自分の周りにどれくらいあるのか、わからなくなってきた。

とり入れし冬薔薇（つば）の蕾咲かむ日を待ち  
るほかにたのむことなし

石川不二子「牧歌」

『牧歌』は冬の歌の多い歌集である。雪のない間は、農場の労働に追われ、作者は歌どころではなかったと回想している。石川不二子の冬の歌は普通の寒さではない。厳寒の歌である。自給自足の苦しさ、ひもじさ。明日のことさえ見えないような日々の記録なのであった。

まえだ・やすこ「塔」会員